様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３０日現在

機関番号：32411
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21720098
研究課題名（和文）　ポストコロニアルの視点をふまえた第二次大戦後の英国演劇と「ホーム」の概念の研究
研究課題名（英文）　Postcolonial Study of “Home” in Post-War British Drama
研究代表者
増田　珠子（MASUDA　TAMAKO）
駿河台大学・経済学部・准教授
研究者番号：80383298

研究成果の概要（和文）：本研究では、ポストコロニアルの視点をふまえて、従来、現代英国の劇作家と認知されてきた作家とその作品に着目し、そこに埋め込まれた帰属意識、すなわち「ホーム」の概念とその問題点や意義を分析した。帝国から英連邦への衣替え、そして第二次世界大戦後の福祉国家への転換は、英国に対する帰属意識および英国人としてのアイデンティティの形成の鍵となる要素であることを実証でき、英国が大英帝国の衰退を受け入れ、乗り越えていく過程の理解につながった。

研究成果の概要（英文）：Based on postcolonial approach, this research explores the sense of belonging, or the idea of “home,” embedded in plays by well-known British dramatists of the twentieth century. The changes from Empire to Commonwealth, and to a welfare state after the Second World War, are among the key factors establishing the sense of belonging to Britain and the sense of a British national identity. This study helps to explain how Britain survived decolonization and the fall of the British Empire.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	200,000	60,000	260,000
２０１１年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	900,000	270,000	1170,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：イギリス演劇、現代演劇、ポストコロニアル、大英帝国、ノエル・カワード

１．研究開始当初の背景

(1)　ポストコロニアル文学の研究が本格化する中で、ポストコロニアル演劇にかんするさまざまな研究書が上梓されているが、ポストコロニアル演劇研究とは、一般的にかつて植民地であった国あるいは地域における演劇活動の研究を指し、いわゆる本国における演劇活動は通常その対象に含まれてこなかった。

(2)　こうした状況の中、アフリカ系作家の作品は、人種問題、移民問題という側面から研究が進んでおり、米国演劇においては、アフリカ系アメリカ人にとって「ホーム」とは現在暮らしているアメリカなのか、あるいは父祖の地であるアフリカなのかという問題意識

の存在が明らかとなっている。
　また、アイルランド演劇は、英国とアイルランドの関係をふまえてポストコロニアル演劇の範疇での研究が進んでおり、そこでは「ホーム」としての北アイルランドと「アウェイ」としての英国の相克が大きなテーマとして浮上している。
(3)　本研究の代表者は、これまで主として第二次世界大戦後の英国演劇において、過去の出来事がどのように提示されているのかについて、また、「自己」と「他者」、「不在」と「喪失」などの二項対立の概念がどのように表象されているのか、その脱構築がどのように展開し、そしていかなる意味を提示しようとしているのかについて、考察してきた。その中で、複数の劇作家が、現在および過去の出来事を舞台上に提示するにあたって、さまざまな二項対立の提示とその脱構築という手法を利用していること、そして明示的であれ、暗示的であれ、何らかのかたちで帰属の問題、すなわち「ホーム」の概念を追究しているという知見を得ることができた。
(4)　この「ホーム」の概念は、(2)からも明らかなように、ボーダーレス化の進む現在の世界において無視することのできない国家とアイデンティティの問題に直結するものであり、対立する「アウェイ」の概念とともに、ポストコロニアル文学研究の分野におけるキーワードである。

２．研究の目的
　本研究では、研究代表者によるこれまでの研究と、最近大いに深化しているポストコロニアルの視点からの文学研究の成果を重ねあわせることで、これまでポストコロニアルの枠組みで取り上げられてこなかった劇作家たち、すなわち一般に英国の劇作家と認知され、英国演劇を代表するととらえられてきた書き手の提示する「ホーム」の概念に新しい光を当て、現代英国演劇の研究における新たな視点の提供と枠組みの形成に寄与することを目標とする。現代の世界情勢を理解・検討するうえで欠かせないアイデンティティと国家の問題につながっていく「ホーム」の概念が、演劇作品において、なぜ、そしてどのようにして提示され、そして何を表象しているかについて、複眼的な角度から理解および評価することをめざす。

３．研究の方法
(1)　ポストコロニアルの視点から文学、とくに演劇作品を研究する際に前提となる知識や思考方法を把握するため、ポストコロニアリズムに関する先行研究の収集・整理・再検討を行った。
(2)　チェコ出身でありインド在住経験を持つ一方で、英国の劇作家と認知され、現代英国演劇を代表する人物の一人と評価されているトム・ストッパードの「ホーム」と「アウェイ」の概念を検討することを最終目標とし、その前提として、彼よりも一世代上で大英帝国を内側から体験しているノエル・カワードにまず焦点を絞り、その帝国意識および愛国心についての考察を行った。カワードと比較検討することで、旧植民地の側から大英帝国を見た経験を持ち第二次大戦後の英国で育ったストッパードにおける「ホーム」と「アウェイ」の意識を際立たせることをめざした。
①　カワードは第二次世界大戦前後に愛国主義的な作品を発表し、自らも「愛国者」として名を馳せた。彼を「愛国者」として知らしめた最初の作品 *Cavalcade*（1931 年初演）、その後「愛国者」としてのイメージを補強するのに貢献した舞台劇 *This Happy Breed*（1939 年執筆、1942 年初演）および制作・監督（デイヴィッド・リーンと共同）・主演をつとめた映画 *In Which We Serve*（1942 年公開）を中心に据え、カワードが「愛国者」として認知されるに至った経緯とその意味について、時代背景をふまえつつ、一次・二次資料を収集・整理・検討した。
②　カワードの作品の中から、主としてジャマイカをモデルに創作した架空の英領植民地の島サモロを舞台とする作品群の考察を進めた。
③　②に関連して、ジャマイカをはじめとするカリブ海の島々と英国にかんする歴史資料の再検討を行った。
④　「愛国者」として有名だったカワードは、一方で、第二次世界大戦後に租税回避のためにバーミューダに居を移し、マスコミから英国を裏切ったとのバッシングを受けている。このことに着目し、カワードがタックスヘイヴンを利用して租税回避を図るに至った経緯を、カワード自身および英国の経済状況を検討することを通して考察した。
⑤　①～④をふまえ、カワードにとっての「ホーム」および「ホーム」に対する「愛国心」の問題を検討した。
(3)①　トム・ストッパードおよびインドにかんして一次・二次資料の収集・整理・検討を行った。
②　トム・ストッパードおよびチェコにかんして一次・二次資料の収集・整理・検討を行った。
③　①、②をふまえてストッパードにとっての「ホーム」の概念を考察し、(2)で検討したカワードの場合と比較することで、帝国から福祉国家への衣替えを余儀なくされた第二次世界大戦後の英国における国家とアイデンティティの関わりの問題を検討した。

４．研究成果
(1)　ノエル・カワードにかんする成果は二件

の論文にまとめることができた。その一つである「『カヴァルケード』と愛国心――ノエル・カワードと帝国の衰退」では、大戦間期を代表する愛国劇とされる *Cavalcade* の大英帝国を称揚する華々しさの陰に逆説的な不安の意識を読み取り、二十世紀初頭のさまざまな社会の変化から感じられる帝国衰退の意識が、一人の劇作家を保守的な立場へ追いやった過程をたどった。この論文は津田塾大学言語文化研究所のポストコロニアリズムに関するプロジェクトの研究会に参加する中で構想、執筆され、プロジェクトの成果として編纂された論集『〈終わり〉への遡行――ポストコロニアリズムの歴史と使命』(英宝社) に収録された。

① 大戦間期の英国は、領土的にも経済的にもかつての勢いを失い、英連邦への衣替えを余儀なくされ、金本位制を放棄せざるを得なかった。第一次世界大戦後の当時は主戦論が敬遠されるところがあり、伝統的な愛国劇 *Henry V* も注目を集めていなかったが、まさにこの時期に新しい愛国劇として大人気を博したのがノエル・カワードによる *Cavalcade* だった。この作品は二十世紀最初の三十年間に英国で起こった出来事をパノラマ的に提示しているととらえられてきたが、出来事の選び方は非常に恣意的である。*Cavalcade* が提示する価値観においては、かつての大英帝国こそが正常な状態であり、そこへの回帰が理想であるため、労働党政権の誕生、ゼネスト、世界恐慌の勃発、植民地独立の兆しなど、社会の変化をもたらしたはずの出来事は取り上げられていない。この作品が初演時に大好評を博したのは、〈大英帝国＝「ホーム」〉というこのゆるぎない価値観が観客に受け入れられたからにほかならない。

② 演劇界のアンファンテリブルとして名を馳せた若きカワードは、晩年、保守的で愛国的なマスターとして有名になるが、この劇的な方向転換の契機となったのが *Cavalcade* の成功である。〈*Cavalcade*＝愛国劇〉という図式は劇評で報じられることで広く流布し、国王一家の観劇により不動のものとなった。自らの主義主張を提示するのではなく、観客の心をつかむことにこそ価値を見出す劇作家だったカワードは、常に観客の欲求に応える芝居を作ろうとし、出来上がった作品に観客が見出し喝采したイメージに反応し、そのイメージを増強する方向へと動いた。大戦間期から第二次世界大戦中の彼は、観客とのこのような協働によって愛国的で保守的な世界を築いていったと言える。

(2) カワードのサモロ創造の過程をたどり、第二次世界大戦後のカワードにとっての「ホーム」の概念を考察した成果は、論文「ノエル・カワードと南の島――『南海泡沫事件』をめぐって――」としてまとめた。

① ノエル・カワードは *Cavalcade* や *This Happy Breed*、*In Which We Serve* をはじめとする作品の中で英国を熱烈に称揚し、これらによって「愛国者」としての名声を得たが、一方で、実は海外で多くの時間を過ごしていた。第二次世界大戦終了後間もない 1948 年には、英領植民地だったジャマイカに土地を購入して家を建てている。さらに、1956 年には節税のために英国内の自宅を引き払い、バーミューダに居を移している。

② カワードはまたジャマイカと思しき英領植民地の島サモロおよびサモロの属するサモラン諸島を舞台とする作品群――一幕劇 *We Were Dancing* (*Tonight at 8:30* の一編、1935 年初演)、短編小説 "Mr. and Mrs. Edgehill" (1944 年執筆)、ミュージカル *Pacific 1860* (1946 年初演)、喜劇 *South Sea Bubble* (*Home and Colonial* として 1949 年執筆、*Island Fling* として 1951 年米国で初演、改訂後 *South Sea Bubble* として 1956 年ロンドン初演)、長編小説 *Pomp and Circumstance* (1960 年出版) ――を 1935 年から 1960 年にかけて断続的に発表しつづけた。カワードがこのように一つの場所を創造して繰り返し自作の舞台に採用している例は他になく、カワードのサモロへの愛着は明らかである。ただし、これらは決してカワードの代表作ではなく、むしろ成功作とは呼びがたいものも混じっている。

③ ①および②を重ね合わせることで、〈カワードはなぜ英領植民地の島サモロにこだわりつづけたのか〉という疑問が生じる。また、この疑問を拡大すれば、〈英国以外の場所に自宅を持ち、また、サモロにこだわりつづけたカワードにとって、「ホーム」と感じられる場所ははたしてどこだったのか〉、さらには〈タックスヘイヴンを利用して租税回避を図ることを決意したカワードは、はたして英国を「ホーム」と見なしていたのか〉という問題が浮上してくる。

④ カワードは *Pacific 1860* 創作時にサモロの創造に熱中し、歴史、伝承、緯度経度、天候、降水量、地形などの詳細を設定した。しかし、当初カワードが描き出したのは英領植民地であるエキゾチックな南の島で支配階級を占める白人たちの因習にとらわれた狭い社会であり、サモロの人々はまったくの脇役でしかなかった。サモロ人が個性を与えられ登場人物として重要な役割を果たすのは、*South*

Sea Bubble が最初である。最初の題名である *Home and Colonial* が示唆しているように、この作品においては本国である英国と植民地であるサモロが対比され、第二次世界大戦後の宗主国からの植民地独立という世界的な動きが盛り込まれている。しかし、冒頭こそ「現代」（＝1956 年）を舞台とする植民地の独立や階級問題の払拭等の改革をめぐる芝居のような印象を与えるものの、最初から喜劇として構想されたこの作品が植民地問題の描出をテーマにしていないことは明らかである。植民地の独立や改革の問題は矮小化され、基盤をなしているのは今日の観点からすればまったく帝国主義的な考え方であり、サモロの人々を見下す白人たちが数多く登場する。結末こそ時代の趨勢に則って独立派が勝利を収めるものとなっているが、語られるのはいわゆる古き良きイギリスの姿であり、浮上してくるのは植民地の人々に頼られ愛される大英帝国のイメージである。

⑤　すなわち、スエズ動乱と時期を同じくして初演された *South Sea Bubble* は、愛される大英帝国像が幻想であることは承知のうえで、その幻想に浸るひとときを観客に与えようとしていると言える。この芝居は、批評家からまじめに評価するに値しない作品と位置づけられたがゆえに辛口の批評に追い詰められることもなく、大ヒットとは言えないもののまったくの失敗作ともならずに 276 回の上演回数を数えた。カワードは観客が喜ぶ芝居を書くことを至上命題とした作家だが、彼の狙い通り、スエズ動乱を経験し脱植民地化をへて英国の軍事力の衰えを目の当たりにしていた初演時の観客は、彼の提供する〈植民地の人々に愛され頼られる英国〉の幻想を楽しんだと考えられる。

　この作品は、一面では第二次世界大戦後の世の中がもたらしつつある変化の是非を取り上げているにもかかわらず、同年初演のジョン・オズボーンによる *Look Back in Anger* とはまったく異なっている。カワードが「怒り」を信条とすることはなかった。彼がめざしたのは、あくまでも「喜劇」だった。1956 年はカリブ諸島出身の作家たちが台頭しはじめていた時期でもあるが、この芝居の「現代」が「怒れる若者たち」の 1956 年ともポストコロニアル文学の 1956 年とも一線を画していることは明らかである。

⑥　①～⑤をふまえると、カワードがくりかえしサモロに立ち戻ったのは、帝国の時代を肯定したかったからにほかならない。第二次世界大戦後、ヒット作に恵まれなかったカワードは、投資の失敗もあり、金銭面で老後の生活に不安を抱え、タックスヘイヴンを利用し租税回避を図ることを決意した。今でこそこのような節税対策は珍しくないが、当時は英米両国で報道されたことからも明らかなように衝撃を持って受け止められ、カワードは英国を裏切ったとしてマスコミのバッシングを受けることになった。カワードは愛国心の欠如から移住したわけではないと主張したが、福祉国家へと転換した第二次世界大戦後の英国が彼にとって決して住みやすいところではなかったことは明らかである。カワードにとって「ホーム」ととらえるに値したものは、高い所得税を課す第二次世界大戦後の〈福祉国家英国〉ではなく、むしろ自分が評価されたかつての〈大英帝国〉であったのではないか。ゆえにカワードは大英帝国を称揚し独立しようとしない植民地の島サモロを自作の舞台に選び続けたのだろう。1964 年のナショナル・シアターでの *Hay Fever* 再演を契機にカワードの再評価が始まるのと時期を同じくして、カワードはサモロを描かなくなる。創作力の衰えも考慮に入れる必要はもちろんあるものの、これは、サモロを描くという作業を行わなくても自己肯定が可能になったからだと考えられる。

(3)①　(1)、(2)をふまえると、大英帝国の衰退の意識が、カワードおよびカワードの喜劇を受容した当時の観客の「ホーム」の概念の形成に大きな意味を持っていたことは間違いない。大英帝国から英連邦への衣替え、そして第二次世界大戦後の福祉国家への転換は、英国に対する帰属意識および英国人としてのアイデンティティ形成の鍵となる要素と言える。カワードが保守化していく過程をたどることは、英国が植民地独立にともなう大英帝国の崩壊に直面し、受け入れ、乗り越えていく過程の理解につながる。

②　カワードの事例をふまえると、大英帝国から英連邦へ衣替えし、福祉国家への転換を経験した二十世紀英国において、国家そのものや国家の体制が「愛国心」の対象となる事態が許容されえないことがあるとわかる。ならば帰属意識、すなわち「ホーム」の概念は、いかにして成立するのだろうか。カワードの場合、租税回避を図ってもなお母国を裏切っていないという感覚を彼に持たせたのは、英王室に対する忠誠心であった。このことは、伝記的事実および長編小説 *Pomp and Circumstance* の記述から推断できる。カワードにとって英国人であるというアイデンティティの源は、「今〈英国〉と呼ばれている国家に対する愛国心」や「その国家の体制に対する支持」ではなく、「世界のどこに住もうと喪

失されることのない、英王室に対する愛着」だと言える。
(4)①　チェコで生まれインドで幼少期を過ごしたのち英国で育ち、現在、英国を代表する劇作家の一人ととらえられているトム・ストッパードは、近年、インドやチェコを舞台の一部とする作品や、亡命ロシア人とその祖国への思いを中心に据える作品を発表しており、それらにはアイデンティティと国家の問題が埋め込まれている。ストッパードの作品を分析すると、国家への帰属意識が形成／喪失されるうえで、帝国の崩壊や新たな国家体制の確立がやはり重要な意味を有していることがわかった。
②　カワード研究には想定していたよりも多くの可能性が含まれていることが研究を進める中で判明したため、当初計画よりも多くの時間を割くことになった。その結果、カワードの「ホーム」の概念の研究の成果をふまえたうえでのトム・ストッパード論を本研究採用期間内に公表することは果たせなかった。しかし、一方では、カワード研究の深化により、従来のカワードおよび彼の作品に対する評価、さらには大戦間期から第二次世界大戦後にかけての英国におけるアイデンティティ形成の問題に新たな視点と枠組みを導入することができ、カワードより後の世代の劇作家及びその作品の研究のさらなる可能性も拓くことが可能となった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
増田珠子、「ノエル・カワードと南の島――『南海泡沫事件』をめぐって――」、『津田塾大学言語文化研究所報』、査読無、第 25 号、2010、17-29

〔図書〕（計１件）
秦邦生、中井亜佐子、富山太佳夫、溝口昭子、早川敦子編著、英宝社、『〈終わり〉への遡行――ポストコロニアリズムの歴史と使命』、2012、123-146

６．研究組織
(1)研究代表者
増田　珠子（MASUDA TAMAKO）
駿河台大学・経済学部・准教授
研究者番号：80383298